

## 縁

青森県新郷村立野沢中学校

三年 岡田 香那美

「人との出会いを大切に」

家族でも友達でも、たった二日の職場体験でお世話になった人でも、もう二度と会うことがないかもしれない人でも。出会ったということは、何かの「縁」があったということだから。

この言葉は、今年の職場体験場所の神社の神主さんからいただいたものだ。

私の学校は、一年生は自分の村内、二年生は隣町、三年生は近くの市内、と、学年が上がるにつれて職場体験で選べる職種が増えていく。

しかし、私は行きたい職場がなかなか見つからなかった。以前は自分の夢である建築関係に行かせてもらったので、今年は、少し違うことも体験しておきたいと思っていたのだ。

「夢」とは言ったものの、私が建築に興味をもったのは、小学生のときに見たテレビ番組から。なんとなくものづくりっていいなあとぼんやりした思いで憧れていた。良いものは百年二百年と残る。しかも建築となれば「大きなもの」なので、完成させた後の達成感もとても大きいに違いない。

その程度の考えであったため、何回か将来の目標が変わったときもあった。でも、あれこれ考えると、

やはり「一番は建築士。」に、最終的には落ち着いていた。

それでも、もっと自分に合った何かがあるかもしれない。そんなことを考えていたら、「お寺はどうか」という話を下級生がしていたのをたまたま耳にした。「寺が有りなら神社はどうだろう。」

そんな、深くはない考えで私は神社を選んでみた。先生に申し出ると、前例がないことなので最初はとても戸惑っていたが、快く手続きをしてくれた。

二日間の職場体験は発見と驚きばかりだった。中でも一番印象に残っているのは、地鎮祭。これは、家を建てる前に、その土地の神様や生き物に、「今からここに家を建てます」ということを知らせ、工事の安全や無事を祈る祭りだ。

まだ家が建っていない空き地に祭壇が作られ、それを囲むように竹を四本立て、縄を張って紙垂を垂らす。祝詞をあげ、玉串を奉納し、参列者のお清めをして土地の四つ角に米をまく。厳かな雰囲気がい、静寂の中に神主さんの声だけが響く。

私が見学したのは、ある年配の女性の家の地鎮祭だった。祭事中は、女性もその息子さんもその場にいた人全員が、真剣な表情で参加していた。

祭りが終わった後、打って変わって女性は花の咲いたような、見ているこちらも嬉しくなるような表情を見せた。そして気持ちに手が取るようにわかるような足取りで、祭壇などの写真を撮り、神主さんのお話を興味深そうに聞いていた。とても生き生きしていた。息子さんの方も口数は少ないが、そんな彼女の様子を温かく、包み込むように見守っていた。

私から見れば、何もなかったの空き地、茶色の地面。でも、彼女にはそこに自分の家が建っていく様子、いや、それだけではない。家族みんながともにくつろぐ、穏やかに優しい時間や空間までもが目

浮かんでいるのかもしれない。

「家を建てる」ということは、一生に一度、あるかないかだ。そうだ、これも「縁」だと言えるのではないか。

今回、地鎮祭を見学したことによって、私は改めて建築の素晴らしさを実感した。

人を笑顔にする、幸せにする。そんな建築に携わる仕事に就きたいという思いが、今、気づくとはっきりしていた。

職場体験の目的。それは、自分の進路選択に役立つとか、自分の将来について考えるきっかけとする、など。

私は中学校最後の神社での体験で、その目的を、本当に達成できたような気がした。

「縁を大切に」

人との出会いは、たとえ一回限りだとしても新しい自分を発見させてくれる。私に見学を許可してくださったあの女性。「今日はありがとうございました。」と一言しか言葉を交わしていないあの女性には、もう会うこともないだろう。でも、確かに彼女のおかげで、私は自分の道を見つけたのだ。

いや、気づいたのはそれだけではない。

「縁」とは人に対してだけのものではない。

一度きりの経験や、一度きりの風景…。これらは全部、自分の人生に関わる、何か大きなきっかけをくれる。

ほんの小さな「縁」を積み重ねながら、私たちは毎日を生きていく。それらはすべて強大な、自分の力となっていく。